

住友吉左衛門友純と大阪府立図書館

呉 谷 充 利

一、発端

中之島に府立図書館が建つ。建物の落成を見て、明治三十七年（一九〇四）二月二十五日初代館長に今井貫一を迎えて開館の式典が行われる。近世大坂が近代へと連なってみごとに開花した瞬間であった。

明治三十二年十二月府知事菊地侃二が出した「大阪府教育施設計画書」に加えられた「図書館設立」がこの発端になる。この前月に「図書館令」が制定される。計画の発表はこれを引き継いでいる。

このとき、図書館建設のため、寄附を申し出た一人の人物がいる。第十五代住友吉左衛門友純ともいとである。翌明治三十三年二月のことである。額は、当時の金額で建設費十五万円、図書購入費五万円にのぼっている。図書館の建設はこの篤志によっている。府の財政ではたしてそれが実現したかどうか、はなはだ疑問である。

住友吉左衛門友純（号春翠）のこの寄附の直接的な動機として、彼が明治三十年に行なう二一八日間に及ぶ欧米視察が挙げられている。その視察において、彼は欧米の実業家が慈善事業に私財を投じること深く感銘したといわれる。がその心中に流れていたものは単なる一

過性の奮起でははるかになかった。

一、住友の家訓

住友は事業の祖、蘇我理右衛門が起こす銅の精錬業を継いで、これを発展させ財をなす。宮本又次氏の『上方の研究』（清文堂 昭和五十二）に拠りながら、この住友の歴史を辿ってみると以下のようになる。蘇我理右衛門が京都市寺町五条に店を構えたのは天正十八年のことであり、寛永七年のちの「住友」を担う理兵衛友以は京都から大坂の淡路町一丁目北西の角にすべての居を移す。

理兵衛友以は大坂で銅吹きから銅貿易、さらに日常の商品の取引にも事業を拡大し、この資力をもって両替商を開業し、大坂一の豪商になる。住友は大坂を地歩にして揺るぎない基礎を固める。住友はこのあと銅山の開発に乗り出し、友以から数えて別子銅山を所有する三代目の友芳のとき、つまり元禄の末年から宝永にかけて最盛期を迎えたといわれる。

住友と懷徳堂との関わりができるのは友俊のときである。友俊は享

保三年（一七一八）に生まれ、友芳の長男友昌の異母弟になるが、病弱の友昌に代わって住友の家政一切をまかされることになる。友俊は懷徳堂の五井蘭州に学ぶ。懷徳堂が官許されて天下の学問所となるのは、享保十一年（一七二六）のことであるから、彼の生まれを享保三年（一七一八）とすれば、蘭州が大坂に戻る元文四年（一七三九）に彼は二十一才になっている。

蘭州（二六九七—一七六二）はこのとき四十三才である。友俊は「懷徳堂」蘭州の儒学を学ぶとともに蘭州を通して契沖の学にも私淑したとされる。宮本又次は、友俊の尽力による契沖没後の顕彰は懷徳堂における契沖の認識を確かなものにしたとし、その意義の大きさを改めて指摘している。この一事をもって、友俊のその人となりが推察される。

五井蘭州の「識語」（後人の加筆したもの）が遺されている。懷徳堂と住友との関係をつよく示すこの「識語」は、宮本又次の研究によれば次のようになる。住友には、精神上の祖、文殊院（嘉休）とすでに述べた事業上の祖、蘇我寿濟（理右衛門）という二人の傑出した先人があり、文殊院の処世訓や書状「旨意書」（勘十郎宛）に書かれる精神が一族によって伝来され、その後の家訓家法にも継承されてゆく。

「旨意書」は浮利に趨^はくことをいましめ、口合を禁じ、掛商内をとめ、人と語気荒く競うことを禁じている。一言でいえば、商いにおける正しさをいうものであり、商業における社会性がつよく住友の家訓として受け継がれるわけである。この文殊院（「政友」法号）の旨意書を宝暦十一年懷徳堂の五井蘭州純禎が校閲して、箱ぶたの裏に長文

の「識語」を書いている。宮本又次は「これは恐らくは入江友俊（友俊）のこと」との関係で、その師五井蘭州に見せて執筆をたのんだものであろう」と推察している。以下は「識語」の文面である。

礼以処^は俊。儉以愛福、福以惠人、惠復養福。久榮不衰之道、吾聞、嘉休住友君之御家也。実用斯道、乃明嫡庶上下之分。塞男女玩好之淫。不然則以市井編戸。焉得能積巨万之貨、建百年之業。嗟乎。世復有諺、所得父勤子逸孫焉者。甚至堂構纒畢。竈突未点。乃債家他人入室、是偷者。視諸住友家、何其吉凶之相霄壤。可不畏哉、可不慎哉、此書乃君之所以喻家人。乃貽子孫、雖如事微。然得其意。推而行焉則其必有不可勝用者

宝暦辛巳四月

五井純禎識 印

「礼をもつて儉を処す。儉をもつて福を愛す、福をもつて人を恵す。恵また福を養う。」この文面は人倫と商を一つにしている。住友の家訓が懷徳堂五井蘭州の「識語」によって、いわば「お墨付き」を得て住友の家法として後々に継承されてゆく。宮本又次は、五井蘭州の「識語」にみる解説的標語も伝えられて住友精神を培ったことを推測し、懷徳堂の学問と住友との関係の深さを述べながら、「文殊院の精神は尊重されて、明治十五年に定められた家法にもそれを継承している」という。

これにしたがえば、われわれは一挙にそうした家訓と懷徳堂との関わりを引き継ぐ明治の住友に至る。徳大寺隆麿が請われて先代登久の

養子となる。明治二十五年のことである。公卿からの養子縁組は容易なことではなかった。明治における公卿徳大寺家と住友家とのこの縁組は三顧の礼をもつて迎えられ、友純（徳大寺隆麿）は翌二十六年住友の家督を継ぐ。第十五代住友吉左衛門友純にこのとき仔々細々にいたって住友の歴史と家訓が開陳されたことは明白であろう。同時に友純もまたそれらを深く理解し、我が身に引き受けて立ったことも確かであろう。

「府立図書館」建設のために寄付を申し出た友純の信念を支えたものに、住友の家訓やこれを裏書きする五井蘭州の「識語」、そしてこれに新たな生命を与えようとする友純の人となりがあつたこととはけつして妄想ではあるまい。なかんずくこうした優れた社会的実践をもつとも深いところで支えたものに、連綿として受け継がれた懷徳堂の学問の精神があつたことは正當なものである。

宮本又次によれば、明治の洋学の天下になってさすがの懷徳堂も影をひそめることになるのであるが、これに復興の氣運が起る。明治四十四年のことである。大阪府立図書館長今井貫一（の首唱により「大阪人文会」）ができ、例会で五井蘭州の伝を講じ、懷徳堂のため公祭を挙行すべしとの声がり、議決される。大阪府教育委員会は、懷徳堂五同志の子孫たる鴻池善右衛門、住友吉左衛門によびかけ、これに加えて勸説し發起人会を開き、互選により住友吉左衛門を会頭にする「懷徳堂記念会」ができる。

明治四十四年十月大阪市公会堂においてこの祭典がおこなわれている。住友吉左衛門春翠は祭典に出席し、会頭として漢文の祭文を朗読する。住友吉左衛門春翠とは友純その人である。住友と懷徳堂とのこ

うした関わりを考えてみると、大阪府立図書館の建設は、一財閥の褒譽を超える意味をもつてきはしないか。

なぜなら近世から近代へと繼承される大坂町人の学の精髓がまさしくそこに生きていることが証されるからである。これをいえば、格物致知と人倫の両輪をもつてする人間知とその実践である。それはおそらく世界的に見ても稀有な近世の遺産であろう。そこに脈打つものは余りにも大きい。府立図書館は近代に繼承されるこの人間知の精華として、今あらためてこれを見なければならぬのではあるまいか。

三、府立図書館の建設と寄贈

府立図書館建設のため、明治三十三年六月一日住友本店に技師長を野口孫市、技師を日高胖とする臨時建築部が設けられる。府立図書館の建設は具体的にどのようなようにしてなされたのか。そのいきさつを「住友春翠」（住友春翠）編集委員会（昭和三十年）にしたがって以下に辿ってみる。

第十五代住友吉左衛門友純に、図書館設立の事案（府知事菊池侃二、府会提出）が伝えられる。明治三十二年の暮れのことである。友純はこれを開き、意を決する。彼は翌一月六日図書館寄附に必要な物件を重役伊庭、田邊らに調べさせている。意見を求められた帝国図書館長の田中稻城は図書館建設費として拾五萬圓、創立図書館購買費五萬圓、これに加えてさらに図書購買基金五萬圓を住友家が寄附することを助言する。大略を得て、友純は、二月十日府知事菊池侃二に宛てて「図書館建設願書」を出している。

田中稲城はこのとき欧米の私立図書館の著名なものを挙げて解説し、大阪市からの土地と維持費の提供に加えて、図書館に住友の名を冠することを助言したとされるが、府立図書館に「住友」の名はまったく無い。友純はこれを固辞したと思われる。友純にそうした私欲は一切無かったのであろう。府知事菊池侃二宛の「建設願」によってわれわれは友純の考えを知ることができる。以下はその文面である。

我が大阪は近年商工業の発達と市政当局者の勉勵によりて顕著なる進歩を為し、その市政の整備においては他の二都に譲らざるのみならず、かえってこれを凌駕するものあるは、世人のひとしく認むる所にこれ有り候。しかれども、つらつら全般の事物を視るに、市民の便益を計り子弟の教育をたすけるの方法に関しては、なお欠(闕)如する所少なからざる様相覚え、ひそかにこれを遺憾とし、機会もあらば若干の資を投じてこの種の事業をおこし、もって拙者の祖先以来大阪に負うたる洪恩の萬一にむくいなく、平素希望まかりあり候。しかるところ、閣下近頃大阪府のために子弟教育の大計を立てられ、府民をして永くその恵に頼らしむるのご盛意にて、図書館設置の事も、またご企画これ有り候趣ほのかに伝承つかまつり、ご深慮の段厚く感佩の至りに堪えず。まことに平生の素望を達する好機会と存じ候につき、すなわち別紙記載の要項に基づき、図書館建物一式ならびに図書基金として金五萬圓を大阪府に寄附し、一はもって目下極めて多端なる市費の一部を補い、一はもって市民のために最も有益なるご盛挙を賛助仕りたく存じ奉り候。幸いに願意ご採納くだされ微志貫徹

候えば、拙者の本懐これに過ぎず候。よって前頭寄附の件ご許可なしくだされたく、別紙相添えこの段願ひ奉り候なり。

明治三十三年二月十日

大阪市南区鰻谷東之町三十六番屋敷

住友吉左衛門

大阪府知事菊池侃二殿

これを読むと、図書館建設を決する二つの動機が彼の内にあったことが分かる。一つは彼が市民のための便益をはかり子弟の教育をたすける施設の欠如をかねがね痛感していて、このための資を投ずる機会を待ち望んでいたことである。もう一つは住友が大阪の地で財をなし、これに報いるためである。

真の始まりは菊池侃二の図書館建設の発議にあったのではない。それは一つのきっかけにすぎない。つまり、友純の心中にあった二つのことが府知事による図書館建設の発議をいわば結晶の触媒として現実のものになったのであり、菊池侃二の図書館建設の議案にいやしくも便乗するような名譽欲などではない、そんなものとはまったく無縁な別の動機を彼がもっていたことがわかる。

この友純の動機のむこうに見えてくるものがある。近世大坂に見る町人の学の伝統と「自利利他公私一如」をもつてする住友の家訓である。ここにおいて、懷徳堂五井蘭州に学んだ友俊の伝を友純に見ることは誤りではあるまい。そうだとすれば、近世大坂の宇宙が近代に受け継がれ、ここに美事に蘇生したことになる。それは繰り返していえば「格物致知」の教えであり、そこに拠って立つ人倫的实践にはかな

らない。

ところで、近世大坂の宇宙が蘇生して近代に蘇るといふそのことはいかに証明されるのか。そうした精神の蘇生があるとすれば、それは空気のように伝わるすぐれて芸術的なあるいは気分的ともいふべき一つの感情として表現されるはずであり、これを証するものは府立図書館の場所的、空間的な芸術表現においてほかにない。その表現は究極において府立図書館の造形に結実していなければならない。

友純と府との寄附契約が明治三十三年四月十七日に結ばれ、十月より三年以内に建物に住友家の手で建設され、府へ引き渡されることが決められる。これにしたがつて、六月一日住友本店に図書館建設のための臨時建築部が設けられる。技師長として設計の任に付いたのが野口孫市である。

野口孫市は明治二年四月二十三日兵庫県姫路市に生まれる。明治二十四年東京帝国大学工科大学造家学科に入学した野口は同二十七年優等の成績で卒業し、さらに大学院に進んで耐震構造について研鑽を積み、同二十九年通信省の技師になる。(故工學博士野口孫市君小伝 日高胖謹識 大正九年)

野口が住友に招かれるのは明治三十二年の初めとされる。嘱託として住友本店銀行建築調査のために洋行する野口は約一年の欧米視察を終え、帰国する。帰国の日付は明治三十三年三月十三日である¹⁾。つまりこの日から約一年前の明治三十二年一月から三月ぐらいに野口は住友に招かれたことになる。

帰国して同年六月一日、技師長に任命された彼は府立図書館の設計に全身全霊を打ち込んだのである。彼が図書館の図面を決定して、府

と協議するのはこの日からちようど半年たった十二月一日である。(『住友春翠』) 図書館建設のための地鎮祭がおこなわれる明治三十三年十一月二十七日から三年余りを数えて図書館が竣工し、明治三十七年二月二十四日引渡しを儀式を終えた翌日、待望の開館式を迎える。(写真―1)

現在の図書館はこのとき竣工したものにさらに左右両翼に後の増築を見ている。この増築は住友の再度の寄附をもって大正十一年になされている。がこのとき野口はすでにいない。大正四年十月二十六日四十七才の若さをもって彼は夭折する。図書館のもっとも重要な部分を設計して彼は他界した。



写真―1 大阪府立図書館 (明治 37 年)

注 (1) 坂本勝比古: 商都のデザイン 日本の建築「明治大正昭和」全十卷 三省堂 昭和五十五年による。

四、府立図書館の思想

建築作品はいわば建築の言葉で書かれた思想を現わしている。府立図書館はその造形において何を語り、何を詩おうとしたのか。

ところで建築の空間的な意味としてのこの言葉を生むものはいった

い何であるのか。それは一言でいえば、空間における人間の身体である。つまり空間と交じりあい、交渉するわれわれの体である。建築の空間は人間のこの身体の体験を軸にして、そこから縦横、奥さらに前後、高低に作為されて創られている。

この造形的言語の構文つまりその組合せ方は、建物のテーマによって違ってくる。この構文を正しく読み取るためには全体と部分との相互作用的な関わりをさぐる必要がある。これをいえば、いわゆる解釈学の循環になぞらえられる。作品の部分と全体との相互作用的な関わりあいにおいて、部分が全体から定義され、全体もまた部分から定義されながら、作品にたいするもつとも妥当な一つの解釈がそこに生まれる。が、それはいま空間論における造形としてである。

一例に、奈良の東大寺と裏千家の茶室「又隠」を挙げてみよう。東大寺の真つすぐな大きな石畳の参道とこの参道の軸線を真正面に受ける東大寺の堂々たる正面、堂内に鎮座する盧舎那仏、表現されるもの的大いさがそこに暗喩され、それは圧倒的な権威となつて現われてくる。近隣諸国にたいする古代国家のまさに権威の象徴として東大寺は君臨したのである。

これに対していま、露地の飛び石を踏んで、隠されるような一軒のあずまやに辿り着く。客は飛び石を踏みながら自身の内面に向かい、清寂のなかに心中を整えてゆく。日常が次第に非日常化される。主の「和敬清寂」の世界が俟つ。茶室「又隠」の小さな戸口（蹴り口）が見える。入れば、自然木と和紙、土壁でできたくすんだ小さな部屋である。冷え枯れた美、皓々と輝く月よりも雲のかかる月の姿の方が味わい深いと村田珠光は言う。茶室は、珠光のそうした美意識に返る表

現としての指向をもっている。露地や茶室の室内は「ひまかれ」のかたちとしてはじめて成り立っている。

東大寺と茶室又隠の造形の相違を説明するものは、国家の権威と冷え枯れというその心持ちのちがいである。建築の造形が思想の表現であるというのはじつはこういうことである。それは物理的な存在ではなく、いわば情感のイデー（理念）のようなものである。こうしたことを確かめておいて、府立図書館に戻つてこのことを考えてみよう。

「中之島図書館は……（中略）……ドームの先端まで九十二尺（二七・八七五）もあつて当時高層建築は皆無で偉風辺りを払い開館当初は本を読むより建物を見物に來た人が多かったといわれる。」（府立図書館の変遷と中之島）大阪府立図書館 昭和四十六年）記事は当時の人々の目に映つた図書館をよく語っている。それほど建物は立派で、図書館自体がまだ珍しく人々は図書館に入ること忘れてその姿に見入っている様子が伝わってくる。

「図書館」の誕生、それはあたかも千両役者のごとく登場した新たな都市の風景であつたにちがいない。府立図書館はその劇的な誕生を自身の造形にいかんなく現わしている。正面玄関は古代ギリシアのイオニア式オーダーの四本の柱とこれが支えるペディメントの破風飾りをもっている。（写真12）そのうしろに半球の銅板葺きの大きな屋根が見える。十字形のプランの真ん中にこのドームが架けられている。

二十段の石の階段を上がる玄関があり、地面より三・二五メートル（筆者実測）ほど高く造られている。その階段は、非日常的な心持ち

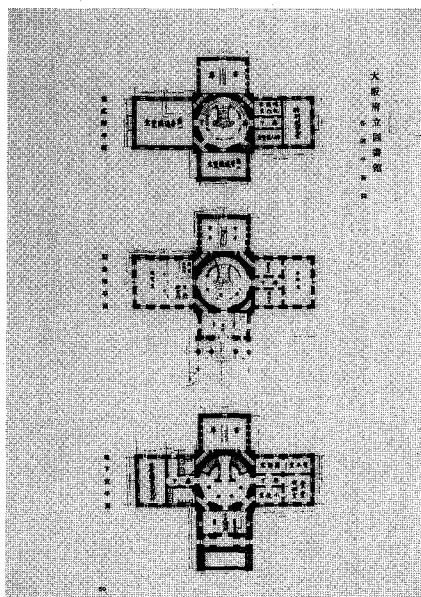


写真-4 大阪府立図書館 各階平面図

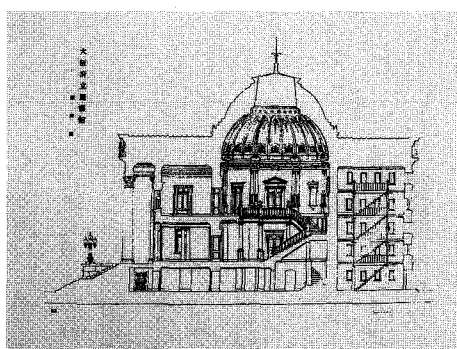


写真-5 大阪府立図書館 断面図



写真-2 大阪府立図書館 正面（現在）

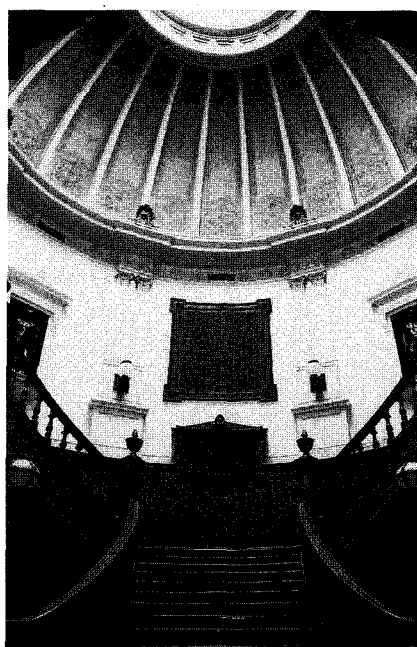


写真-3 大阪府立図書館 ホール

をもつて向かうべき場所を暗示している。現在はこの正面玄関は閉じられて、人々は一階から（つまり地下から）入るようになっていたのであるが、この当初の姿においていま図書館の造形の意味を考えてみたい。

石段を昇って、玄関に足を踏み入れドームの架かる中央のホールに立つとき、われわれはその円天井の空間がもつ美しさに心打たれる。ホールの真ん中に重厚な木製の階段が流れるがごとく存在する。その階段を中心に見て、ちょうど左右対称形にアルコーブが二つ壁に作られ、二対の像が置かれる。（写真-3）文神像と野神像である。北村西望の彫刻である。円天井のドームの基部に東西の八賢の銘が彫られている。菅公（菅原道真）、孔子、ソクラテス、アリストテレス、シェークスピア、カント、ゲーテ、ダーウインである。

ドームの最上部から落ちる自然光が内部の青い凹面の天井に映えて、この空間の荘厳さを一層奏でている。ホールを閲覧室、書庫、その他の諸室が十字形に囲

んでいる。(写真―4) 造形のもつとも高い関心がこの中心ホールに
払われていることは明らかであろう。(写真―5)

五、京都府立図書館

大阪府立図書館に払われた造形思想を明らかにするために、他の一
つの図書館に目を転じて、考えてみたい。大阪府立図書館が建設され
る五年後の明治四十二年(一九〇九)、京都の岡崎に京都府立図書館
が建てられる。設計したのは武田五一(明治五―昭和十三年)であ
る。総工費は当時の金額で十一万四五四八・七八円とされる。額は、
大阪府立図書館の予算額十五万円に比してやや低い、大略同程度と
いえる。

京都府立図書館の沿革によれば、この館の具体化は府知事大森鐘一
の明治三十八年の館舎新築の提案にはじまっている。府会の承認を得
て、岡崎の平安神宮の敷地一〇〇〇坪が供される。この館舎の設計が
先述の武田五一に依頼される。(「京都府立図書館 建物記録調査報告
書 京都府教育委員会 平成九年三月」)

武田五一は、アール・ヌーヴォーの影響をつよく受けているといわ
れるが、建築にたいする自身の考えは、もつとも実用に適する形式を
うむ「構造主義」として語られている。彼は、明治三十四年(一九〇
一)ヨーロッパに図案研究のために留学し、二年後の明治三十六年帰
国している。京都高等工芸学校教授に着任した彼にこの府立図書館の
設計が依頼されるのである。

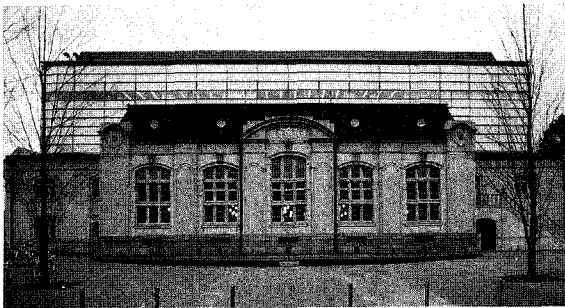
ヨーロッパでつぶさに目にした自由な造形精神と彼が「構造主義」

という実用に適した形式をこの
図書館に見るのは容易である。
自由な造形の精神は今日残され
た正面によく現わされており、
実用に適した形式は、この図書
館のプラン(平面図)に明瞭に
示されている。

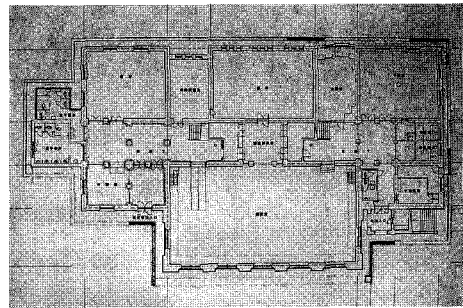
ところで、プランは、この図
書館のもつとも重要な場所が
「閲覧室」であったことをはっ
きりとあらわしている。(写真
―6) そのことはまたこの閲覧
室が吹抜けの高い空間をもつて
直接正面の立面を構成していた
ことを見れば明瞭であろう。

(写真―7)

武田五一のこの図書館の計画
はあらためて大阪府立図書館の
造形思想を際立たせる。大阪府
立図書館のもつとも重要な場所
は閲覧室ではなく「ホール」と
してかたちづけられている。



写真―7 京都府立図書館 保存された正面(現況)



写真―6 京都府立図書館 一階平面図
手前の大きな室が閲覧室である。

六、図書館の起源

図書館のはじまりはメソポタミアの粘土板蒐集にあるとされるが、古代図書館として名高いのがアレクサンドリア大図書館である。アレクサンドリア大図書館が完成したのはプトレマイオス二世フィラデルフォス (308-246 BC) の時代であり、ムーサ (ギリシア神話で学問、芸術を司る女神) を祀った神殿ムーセイオン *Museum* に付属してこれが設けられる。(岡田温・図書館 丸善 平成九)

文字通り、そこは古代における学問の殿堂であったといえる。人間の知が文字として記録され、図書となりそれらは蒐集され保管される。保管庫は「ビブリオテーク」(*bibliothēkē* 本+θήκη 箱) と称され、貴重な学問の場所が生まれる。図書館の誕生である。

ところで、アレクサンドリア大図書館が古代社会唯一の図書館ではないにしても、今日伝えられるこの図書館のすがたは図書館の何たるかを考えるうえで大きな示唆を与える。アレクサンドリア大図書館は人々の生活とどのように関わりあっていたのか。これについて、まず注目すべきはそれが神殿ムーセイオンに付属して設けられていることであろう。

つまり、図書館は神殿という神聖な領域に置かれ、日常の場所から一段高いところに創られているのであり、日常性から脱するある精神性が図書館に存在していたことがここに推察されるのである。単なる日常的な道具性ではない図書館の高い精神性、象徴性がまさにそこに存在したことは明白であろう。

が今日、蒐集される人間の知の記録は膨大なものになり、知の貴族

性もおのずと大衆化され、その宝庫たる図書館も変貌する。端的に言えば、図書館は今日日常的なものになって人々に利用される。文明の進展とは別言すれば大衆化である。

七、「図書館に行く」

二十世紀の哲学の言葉に「現象学的還元」といわれるものがある。難解な言葉であるが、要するに、われわれが素朴に経験する日常世界との交渉のスイッチを一旦切ってつまりそれを括弧に入れ、あらためてこれについて元から考えてみようとする、エドムンド・フッサールの哲学における新たな着想をその言葉はあらわしている。

こうした哲学のことをここに引くことの是非はともかくとして、われわれが「図書館に行く」ことをこれに少し倣って、いま問い直してみたい。「図書館に行く」ということは、つまるところ収蔵された本を手にして読むことにほかならず、本と人とがそこで出会うことである。これを取り持つのが図書館の司書である。

図書館にやってきたこの人の行為は、「行く」と「読む」という二つに分節される行動の意味によってはじめて成り立っている。

「行く」と「読む」とも人の意志であるが、前者と後者の行動を支えるものは同じではない。「行く」ことは簡単にいえば移動的意志であるが、「読む」ことはそうした空間の移動的物理性としてではなく人間の静止的な精神的作業として存在している。この二つの行動が「図書館に行く」ことによってつながる。「図書館に行く」ことの優れて人間的な意味が現われる。人間の意志の自由、文字を読む人間

の普遍的理性さらにこのいとなみを包む人間感情である。つまり、知・情・意を行使して、人は「本を読む」。

「本を読んで」いったいわれわれは何をしようとするのだろうか。しらべたいこと、たしかめたいことがあるだろう。がもつと大切なことはなんといっても「本を読んで」学ぶことである。「本を読む」とは書かれた文字を通してじつは「聞く」ことである。聞くためには、ことばに謙虚に耳を傾けなければならない。真摯な気持ちなくして読書は成り立たない。

こうしたことからいえば、読書の精神は芸術作品の鑑賞に似ている。芸術作品を本当に鑑賞するためには、どこまでもその表現を通して作品に近づいてゆかなければならない。これを自己流に見たり、聞いたりしてしまうと、結局自分の感情や考えが逆にそこに移入されてしまい、真の鑑賞はできない。

芸術作品は鑑賞者によって再創造される。ハンス・ゼードルマイアーは名著『美術史の理論と方法』（島本融訳 みすず書房 昭和四十三）のなかで、作品にたいする鑑賞者の気構えや態度の大切さを強調している。芸術作品は一般にさまざまな解釈を生むのであるが、作品の正当な解釈はただ一つであると彼は言う。つまりゼードルマイアーによれば、この正当な解釈に道を開くものが作品に臨む正しい「構え」なのである。彼は次のように語っている。

ひとはショーペンハウエルの言葉にならって、芸術作品の前に立つこと身分の高い人物の前に立つごとくでなければならぬ。つまり帽子は手にして、何か語りかけてくるのを待つわけであ

る。（『美術史の理論と方法』「解釈の問題」前掲書）

帽子を手にしてその前に立つという芸術作品にたいするこの姿勢は、同じように書物に対する姿勢でもあることは明瞭であろう。が念のためにいえば、それは無批判に盲目的に作品に向かえと言っているのではけつしてない。まず、作品を正当に知ることが大事で、これを欠いて真の批評や批判は成り立たないということである。

書物に記された文字が読まれるためには、何よりもそれにいのちが与えられ、再生されなければならない。イメージとしてあるいは概念としてまた叙事的なことばとしてゆたかにまた正確にさらには生きいきとしてである。文字に生命を与えるのはこれを読む人間である。彼は帽子を手にしてはじめてその語るところを真に聞くことができる。

一つの言葉を正確に、ゆたかに生きいきと捉えるためには読者のいわゆる正しい構えが大切であることは明白である。芸術作品の現わす気分や感情をかたちづくるのが色やかたちであるのに対して、書物が組み立てる概念や思想は言葉や文章によって構成される違いがただそこにあるだけである。美術作品として書棚を飾った書物の歴史は、このことを示唆しているように見える。

「本を読む」とことは、記された文字を読んでそのことばを聴くという高い精神的作業である。そのことはじつをいえば日常的な四肢の生活を一旦中断することによってはじめて成り立つている。換言すれば、それは日常茶飯事から時間的、場所的に離れる非日常性をもつ。非日常性の空間的・造形的演出はしたがって図書館をして図書館たらしめる重要な要素である。「本を読む」場所としてのそうした非日常

性は、アレクサンドリア図書館が神殿ムーセイオンの域内に設けられたことに示唆されている。

ところで非日常性の演出は建築造形の根本の思想として、古今東西さまざまに表現されてきた。長い参道がなによりもそうであるし、神殿にいたる神さびた階段はこれをさらに確かなものにしていく。一例に、長いあいだその信憑性が議論された福山敏男博士による出雲大社の復元図が近年金輪締めの本三の巨木が発掘されたことよって実証される。復元図に示される出雲大社の長い階段は神域の神々しさを語って余りあろう。

また、茶室の露地は技巧を凝らしたこの演出であり、露地について、利休は次の歌を詠んだと伝えられる。「露地はただうき世の外の世界なるに、こころの塵をなどちらすらん」。歌は露地にこめた深い心持ちをとらえている。

非日常性の造形は、このような空間的アプローチに留まるのではない。それは日常世界にたいするもう一つの世界を生み出す。内部の宇宙である。パリのノートルダム寺院は、高い天井によつて造形化されるこの内部の宇宙のすぐれた例である。ほぼ五十メートルに達するゴシックのヴォールト天井がこれを見事に現わしている。また、「シヤルトルの青」と呼ばれるシヤルトル大聖堂（フランス）のステンドグラスは内部の宇宙を心的な光の世界に表現して、その稀有な美しさが訪れる者を嘆息させる。

翻って言ってみれば、こうした非日常性こそがまさに文化の根源なのである。建築の美が人々の心を深く捉えてきた理由の一つがじつはそこにある。非日常性を現わす空間の造形は何よりも象徴的なもので

ある。例をいえば、階段はすなわち天へ到る神聖な道であり、またドーム型の内部の天井は、天上の世界を現わしている。同様に円形のフォルムは求心性や中心性さらに放射性を表現する象徴である。こうした象徴のはたらきによつて人間はコスモスとしての都市を創ってきたのである。

ところが、この象徴性を解体して、空間を機能化したのが産業革命にはじまる近代である。建築は一言でいえば、象徴から道具になった。空間は座標空間的な均質性を与えられ、純粹化した分、無機的になる。空間は機能である。文明としての近代は建築学的にいえば、これに尽きる。文明の進展は非日常性を日常化し、われわれの生活をより道具的にした。

「本を読む」根本の意味は日常性の停止であり、帽子を手にもつてこれに對しなければならぬ。こうした気持ちを欠いて「読む」ことは成り立たない。図書館に行くことは今日なおこのような気持ちに裏づけられるものがあつて然るべきであろうことは言うまでもない。したがって、運んだりするのに便利なだけのいわゆる機能的な図書館は、この非日常性を欠いている。

本を読む動機には、日常性に解消されない非日常性がある。はじめはおわりに解消されはしない。はじめははじまりなのである。アリストテレスの言葉をここに借りていえば、アルケー（始原）はどこまでもテロス（目的）なのである。あるいはこれを簡単に「初心忘るべからず」といえばよいのかもしれない。

八、府立図書館の造形世界

明治三十七年、府立図書館は開館式を迎える。図書館のかたちをあらためて見てみると、四角と円できていて。

二十段の石階段を昇り、イオニア式オーダーによって作られる正面玄関の前室を通って、扉の敷居を跨ぐと、ドームの青い天井が天窓の光に映える。ホールに流れるように木製階段が重厚な裾をひらいていく。階段を中心軸にして文神像と野神像が左右両側に対称的に置かれる。黙示するがごとくアルコーブに鎮座してその二つの神像が迎える。

円形のホールから球形の天井を仰いでみれば、天空のごとく見えてくる。銘板の帯が古今東西の八賢を刻む。菅公（菅原道真）、孔子、ソクラテス、アリストテレス、シェークスピア、カント、ゲーテ、ダーウイン。ホールは図書館のまさに見せ場であり、精魂を傾注した造形の粋が美事なまでに凝縮している。ホールはまさしくシンボリックな場となつて図書館の崇高さを詩う。

二階のこのホールを中心に同じフロアで閲覧室、書庫、事務室がつながっている。全体は三層で構成され、地階（一階）には児童閲覧室、三階には特別閲覧室が設けられ、それぞれのフロアには書庫が付けられている。玄関は地面から二十段の階段を昇って三m二五cmぐらいの高さに位置する。玄関を仰ぎ見て、人は図書館に入る。玄関から中央のホールに足を踏み入れると、そこには前述した重厚な木製の階段が三階のフロアに届く。中央ホールを三階内部のバルコニーが取り巻いて、ホールの求心性が造形的に一層高められている。

階段の造形が意味するものは明瞭であろう。地にたいする天である。地と天がそこに空間化されるのであり、ホールは地から天を仰ぎ見て、あたかも宇宙に立つような錯覚をふと覚えさせる。図書館は、平らな四角ではない。中心は円形で求心的であり、天を仰ぎ見るがごとく天井が創られている。中央部の円形のドーム型ホールをちょうど十字形に囲む立体がこの図書館の空間的な機能を明瞭にしている。そのホールは図書館の象徴性を、これを囲む四角な立体は図書館の機能性を表現している。こうした図書館の建築的造形は、畢竟すれば「帽子を手にして」「本を読む」精神の意味つまり本に向かう人間の高い意志をその空間に詩いあげている。

正面に住友吉左衛門友純の言葉が彫られている。「建館寄附記」である。

我が大阪は関西の雄府にして、人口百万、財豊かに物殷んにして諸学競い興る。而して図書館の設独り焉を闕く。是に於いて、府庁、建設の議有り。某、自ら揣らず、図書館一字および図書財本若干資を献じ、もつて微力を効さんことを請う。府議して之を納め、明治三十三年十一月に起工し、三十七年一月に至って成れり。それ、市内の交通、五州の貿易経済の術は、商工より急なるは莫し。而して大阪は商工の淵藪（集まるところ）と称す。

斯の館に入る者は、仰いで国家の盛運を思い、俯して我が府の富源を察し、之を培い、之を養い、諸学理に参じ、益ます功を將來に収めよ。庶幾くは府庁建館の義に負かず、某も亦た余栄有るに与らんことを。（銅板 明治四十一年七月）

「この館に入る者は、仰いで国家の盛運を思い、俯して我が府の富源を察し、之を培い、之を養い、諸学理に参じ、益ます功を将来に収めよ。」友純がここに言う「国家の盛運」は教条的な国粹主義を意味しているのではない。その言葉は、明治という時代が直面する「国家の盛運」に託して、まさに社会に望まれるべき一つの理想を謳っているだけである。このひたむきなまでの気持ち「仰いで」のことはに現わされている。

そのために「俯して我が府の富源を察し、之を培い、之を養い、諸学理に参じ」なければならない。彼はこう言っているのであり、「富国強兵」という明治の国家主義をここに繰り返しているわけではない。「富の源を見据えて、これを培い、これを養いながら学問に学ぶ」ことを彼は述べているのである。

「仰いで……、俯して……。」という精神の世界を、階段ホールの象徴する天と地の世界に映してみることは誤りではない。このことを考えてみると、銅板に語られる友純の世界は、野口孫市の手によって美事に空間化され、造形化されている。友純と野口孫市は図書館の建設にあたってほとんど一心同体ではなかったか。二人はまさに一つの精神世界を共有してこれを実現している。

友純が図書館建設に込めたものは通り一遍のものではなかった。敷地の選定に関した彼の手紙がこれを語る。図書館の敷地については、府が無償、永久に提供することになる。明治三十三年二月十二日本店支配人植村俊平に宛てた手紙のなかで彼は敷地に触れて次のことを書いている。

図書館の件につき、西澤書記官と交渉の結果御報下されしよりやうそろ。しかる処図書館建設の位置については中之島公園現形^{しやう}確と記憶し申さずさふらへども、今日予定の位置も将来あまり面白からざる位置のよう存じそろ。小生の兼てより考えそうろう場所は左図の如き場所を選定致したき希望に御座さふらへども、なほ将来の事など当局者に聞き正し、その後実地一覽の上ならでは小生の希望も確定致しかねさふらへども、とも角今日の処にては、予定の場所よりも公園内にては優等の場所と存じそろ間、一寸申し入れ置きそろ。過日当地にて知事に面会の節も図書館の事ならびに位置の事など一寸話出でそろあいだ、小生希望の場所大略申し述べおきそろ。(後略) (『住友春翠』)

友純が建設を希望したのは、現在の大阪市庁のところであったとされるが、はじめに府から示された敷地は彼の思惑とは違った「あまり面白からざる位置」であった。手紙にはこれについての彼のこだわりが書かれている。

ところで、府立図書館の寄附を思い立った彼の動機として、明治三十年におこなわれる欧米視察旅行が挙げられている。この旅行は四月十三日横浜を出港し、十一月四日神戸に帰港するまでの間七カ月にわたる。旅の日程については『住友春翠』のなかにくわしく記されている。この旅程で、彼はシカゴ大博覧会とき建設された美術館の保存資金として、富豪マーシャル・フィールドが百万ドルの寄附をしたことを聞いている。

友純の欧米視察におけるこうした見聞が府立図書館建設のための寄

附を願ひ出る大きな動機であつたといわれる。しかしながら、外遊中のこの見聞のみをもつて府立図書館建設の寄附を願ひ出たすべての根拠とすることは皮相な見方といわざるを得ない。友純にはじつはもと深く心中に期するものがあつたといわなければならない。

九、住友吉左衛門友純——家憲の継承——

徳大寺隆磨が住友吉左衛門友純を名乗つて、住友家第十五代の家長となるのは明治二十六年四月のことである。この相続の式が四月二十八日に挙げられる。

第十四代の家長登久は新家長たるべき隆磨に辞令を受け、隆磨は前に進み、跪いてこれを受ける。『住友春翠』にこう書かれる。

登久子さきに時運のやむを得ざるに会し、しばらく家長の任を承くるといえども、今や隆磨内孝慈にして外令聞あり。宜しく我家督を欽承してますます家道の昌盛を致し、誓つて祖宗の神霊を安んぜよ。

隆磨は第十五代家長吉左衛門友純となつて、祖宗の神霊を拝して次の誓告文を朗読する。

これ明治癸巳四月吉日、否徳吉左衛門家長の敎命を奉し、我家督を祖宗の照前に継承す。おもうに我家産は祖宗の家産にして一代のよく私すべきにあらず。このゆえに家長としては、宜しく家

衆の輔弼により、ますます家資増進の道を計り、これを兒孫に傳えて永く家聲を墜さざらん事を期せざるべからず。

おもうに我家憲は先世授受の訓誡にして兒孫永く率由すべきの典謨なり。このゆえに家長たる者みだりに私意をもつて改竄すべからざるは勿論、誓いて厳守すべき要綱とす。……(後略)……。

住友第二十二代家長吉左衛門再拜敬白

この誓告文は、先代の築いた家産を継承し、増進の道を計つて子孫に伝えること、住友家の家訓は、私意をもつてこれをつくり変えてはならず、家長のかたく守るべき要綱であることを言っている。三顧の札をもつて迎えたこの友純を指南したのが総理廣瀬宰平である。友純は同じ席でこう述べている。

今般友純否徳をもつて家長の大任を負うといえども、入家以来日もまだ浅く百般の家政を挙げて独断専行せばおそくは過ち多からんことを顧念す。そもそも我が廣瀬君はすでに当家中興の元勳五世の阿衡(宰相)なり。余において之を敬愛すること師父の如し。今や年耳順を加え専らその壽康を養うべく細事をもつて煩わすを欲せずといえども、今の時に当り、請う務めて余が不敏を善導し余が怠過を規正し旧により我家の総理として家政の要領を総覧せられん事をこいねがう。

以下雇員末家においても、余にしていやしくも過失ありと認むる時は、すべからく規諫直言を惜しむなかれ。余また之を改むるに憚らず。反省顧慮し諸僚と共にいよいよ家道の隆昌を致し、幸

いに家長の任を全うせん事を希望す。

このとき、徳大寺隆麿は先世七代を加えた二十二代にわたる住友家の系譜に連なつて家長となりこれを名実ともに継承したのである。友純は誓告の文の末尾に「住友第二十二代家長吉左衛門再拜敬白」と結んでいる。自らを二十二代とした理由は、「家伝の系譜によつて、帰商した初代政友の前に加えて、住友を初めて姓とした備中守忠重から備前守頼定、式部大輔定信、土佐守信定、若狭守政俊、土佐守政重、權左衛門尉政行の七世を数えたのであらう」（『住友春翠』）と推察されている。

「住友第二十二代家長吉左衛門」のこの明記は重要なものである。それは友純が住友における系譜の意味を明確に自覚したことを示す。連綿として引き継がれる住友の史の詳細が総理廣瀬宰平を通して友純に開陳されたことはもはや明白であらう。住友第十五代家長の任の意味するところは友純のこの誓告文にはつきりと現わされている。家産の継承と発展、家憲の厳守は第十五代家長住友吉左衛門友純といえども越権の許されないもつとも重要な項目であつたことはいうまでもない。したがつて、「住友第二十二代家長吉左衛門」の名が示すものは、この家憲の体現者であつて、これを超える者ではない。

こうしたことを考えてみれば、府立図書館建設のための寄附願いが友純自身による発案をもつてすべての根拠とする見方には幾分無理が生じる。連綿として受け継がれ、友純にいたる住友の家訓は彼自らがしたがうべき規範であつたことは明らかであり、仮にこれを超える発言があるとすれば、そのことは難航をきわめたであらうからである。

結論をいえばこうである。友純による府立図書館建設寄附願いの根拠は、住友の家訓の伝承のなかに一つの思想をもっている。友純は深くこれを汲み上げその思想を明治の大阪に具現した。彼の欧米視察はそのきっかけにすぎなかつたのであり、その一見聞のみをもつて図書館建設寄附願いの根拠とすることを皮相とするのはじつはこうしたことに拠っている。

明治三十三年二月十日付の府知事菊池侃二に宛てた友純の建設願書に、「（大阪は近年商工業の発達と市政の尽力によつて大きな進歩を遂げ、市政二都に譲らず、かえつて之を凌駕するものがあるが）、市民の便益を計り子弟の教育を扶くるの方法に關してはなお闕如する所少なからざる様相覚え、ひそかに之を遺憾とし、機会もあらば若干の資を投じてこの種の事業を興し、もつて拙者の祖先以来大阪に負うたる洪恩の万一に酬いたく、平素希望まかり在りそる。……」と書かれる。

「拙者の祖先以来大阪に負うたる洪恩」のなかに住友の繁栄を築いた大阪の一つの精神風土がある。「市民の便益を計り子弟の教育を扶くる方法」は、じつはそうした精神的遺産を示唆している。住友自身が大阪に受けた学恩がある。それを明白にするものは、とりわけ五同志に始まる大阪町人の学であり、この府たる「懷徳堂」の存在である。商と学は大阪の眞の繁栄を築くまさに両輪であつた。

府立図書館建設寄附願いのなかに、住友の史におけるこうした学の意味を見ることはけつして飛躍ではない。彼はその学恩を改めて大阪に返そうとする。友純は建館寄附記（一九四一年七月）に記している。「我が大阪は関西の雄府にして、人口百万、財豊かに物殷んにし

て、諸学競い興る。…（中略）…それ、市内の交通、五州の貿易経済の術は、商工より急なるは莫し。而して大阪は商工の淵藪と称す。」商と工をなす都大阪の繁栄がこのように謳われている。大阪町人の学はここに明瞭であろう。

大阪の地に新たに図書館が建設される。この願いを込めて彼は言う。「この館に入る者は、仰いで国家の盛運を思い、俯して我が府の富源を察し、之を培い、之を養い、諸学理に参じ、益ます功を将来に収めよ。」商工の富と学の理、彼は明瞭にこの二つのことを述べている。

ところで、町人の学問所として近世大坂の学問を大きく支えたのが含翠堂と懷徳堂であるといわれるが、他に篠崎三島・小竹父子の「梅花社」、藤沢東畝の「泊園書院」、大塩平八郎の「洗心洞」、漢詩の「混沌詩社」などがあり、また書籍、巻物の収集、標本のコレクションをもつてなし、その博識と交友の広さで世に知られた木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）などが挙げられる。

このなかで、住友と深い関わりをもつのが懷徳堂である。なかでも、文殊院（「政友」）の「旨意書」に対する五井蘭州の識語は住友と懷徳堂との密接な関係を示す。友純が述べる商工の富と学の理は、翻つていえばじつは大阪町人のこの学の雄たる懷徳堂の精神に重なっている。懷徳堂に見る近世大坂の学は、たとえばルネサンスの遠近法がそれを象徴するような芸術的、つまり自覚認識的な西洋近代の人間と科学の統一にたいしていえば、より倫理的な実践をもつてなされる人間と科学の優れた統一であったということが出来る。

個物の本質から知を立てて、宇宙の原理を知ろうとする懷徳堂「格

物致知」の学は同時一体にこれを支える人間みずからの主体性をつよく求めている。繰り返せば、その学の精神はまさにこの両輪をもって成立している。格物致知とこの人間の主体性は「越俎」をもつてなされる学の発展においてより実証的な科学とこれと一つになる優れた人倫の実践へと進んだ。

われわれは、実証的科学的頂点に山片蟠桃を、また人倫の実践において緒方洪庵の万人を救う法たる医術の精神を見ることが出来る。懷徳堂の学の系譜につながるこうした精神こそ、友純の府立図書館建設願いがもつ真の意味である。彼が語る商工と学の理は、近世大坂町人の拠つて立つところとそこに生まれた学問の意味を見据えたものであったことはもはや明白であろう。

結論的にいえば、府立図書館が表現する造形的生命は近世大坂の学の意味へとまさに遡る。すなわちこのたぐいまれな建築作品は、近世大坂に生まれた稀有な精神を近代に継承するまさに造形的精華であったといえる。

府立図書館は二期にわたって建設される。一期目は、すでに述べた明治三十三年の起工によるものである。二期目に、最初の図書館が早や手狭になったために、両翼が拡張されて増築される（大正十年）。友純は一期目と同様にこのための資金を府に寄附している。二期目の工事については、正面から左右両翼に新たなスペースを付け加えただけであるので、野口孫市の手になる一期目の作品に的をしぼって再度考えてみたい。彼は二期目の工事に触れることなくこのときすでに他界しているからである。

十、住友本店臨時建築部―建築家、野口孫市―

野口孫市が生まれたのは、明治二年四月二十三日である。その日から数えて四十七年の生涯を師辰野金吾は深く悲しみ、早すぎたその死を惜しんだといわれる。野口孫市が本家に招かれて洋食の饗を受けた一つの記録が残されている。「重役会を本店に開く 野口孫市（建築技師）を雇入る事に相成、重役及岡、植野、庵地、高木、野口等本家に於て洋食の饗を受く」明治三十二年一月二十四日、住友本店理事田辺貞吉の日記である^①。シャンデリアの光が磨かれたテーブルに落ち、華やかな歓談の夕げのひとつが目に浮かぶ。

野口孫市は住友入社を前提に明治三十二年二月から明治三十三年三月まで洋行費六千円を支給されて欧米に遊学している。日付から推せば、この洋行を祝して宴の席が設けられたのであろう。彼はこの日をもって住友に抱えられ、その中枢を担う筆頭の建築家としての地位を得る。あるいはむしろ住友は後世に名を残すまれな建築家を手にする幸運をこのとき得たというべきなのかもしれない。ちなみに、これより前、野口孫市は住友から四ヵ月の奨学金を受けている。明治二十六年のことである。彼が住友と関わる最初の記録になっているが、身分の拘束はなかったと思われる。

「野口は、本店と銀行の新築、須磨別邸の建設に就き調査を委嘱せられて欧州を巡り、この春帰朝してゐた。」（『住友春翠』）と記されるとおり、本店、銀行の新築、須磨別邸という住友のもっとも重要な建築物を設計すべく欧州をめぐる彼に明治三十三年三月十四日付で次の辞令が出されている。彼が帰朝するのは、前日の三月十三日である。

臨時雇申付候事

野口孫市

但 準等内五等 月手当金百円支給

本店土木課勤務申付候事

臨時雇 同人

右辞令相成候条此旨及通達候也

住友吉左衛門友純が府立図書館建設願書を知事菊池侃二に提出したのは、明治三十三年二月十日であり、遡る同年一月六日友純は「意を決して、重役に、図書館寄附に就いて命じた」（『住友春翠』）のである。欧州視察から野口が帰朝するのは三月十三日であり、翌日彼は臨時雇の辞令を受ける。四月二十七日図書館寄附契約が友純と府とのあいだに取り交わされ、住友に臨時建築部が設けられる。住友史料館の記録文書に「六月一日日本店直轄、重要ナル新築工事ヲ管掌スル為臨時建築部ヲ置カル」とこれが記される。この建築部の技師長に野口孫市が就く。技師は日高胖である。友純の図書館建設に賭ける並々ならぬ決意が見えてくる。

図書館建設が具体的日程に上るのは、野口が欧州視察から帰ってからのことである。視察は、本店、銀行の新築、須磨別邸のためのものであり、図書館建設のために行なわれたものではなかった^②。野口孫市は当初目的とした本店、銀行の新築、須磨別邸の設計には取りかからずに、欧州見聞の余韻醒めやらぬまま、真っ先に府立図書館の設計に向かったわけである。

野口孫市は十二月一日図面を決定し、府と協議している。技師長の任に就く六月一日から六ヵ月の歳月をかけてこの間彼は図書館の設計に打ち込んだ。彼は住友のお抱え建築家として筆頭の地位につき、友

純の図書館に賭けた並々ならぬ決意をみずから汲み取って、余すなくこれを表現したのである。

享保大坂にはじまる学の雄「懷徳堂」、これと深くかわる住友の系譜、府立図書館の建議と第十五代住友吉左衛門友純、そこに登場する建築家野口孫市、この人間の連綿としたつながりのなかにわれわれは稀有な歴史の幸運を見る。それはまた日本の近代にみるもつとも幸福なクライアントと建築家との関わりであり、このたぐいまれな建築作品はまさしくそこに生まれている。野口孫市その人もまた大阪の学の精神を住友吉左衛門友純その人とまさに分かちあっていた。府立図書館の造形はこれを明瞭にして余りある。

注(1) 小西隆夫『北浜五丁目十三番地まで』『住友本店臨時建築部の創設と野口孫市』創元社 一九九一年

(2) 一部の著作に野口孫市の欧州視察が図書館のためになされたと記されているが、誤りであろう。

十一、府立図書館のプランと文神像、野神像の意味

北村西望による二つの彫刻が図書館に立っている。彫刻は二期目の工事のとき、ホールの階段正面、左右に置かれたといわれるが、像を鎮座させるアルコーブがそもそも一期目に用意されているから、それらは二期目の発案ではなく、当初の意図に基づいたものであろう。二つの彫像はこの図書館の何たるかをはっきりと語る。右の像は、右手に節くれだった棍棒を握っている。(写真―8) 左の像は、左手に書物をひろげ、これを見ている。(写真―9) 前者は野神像を、後者は



写真―8 ホール 野神像 (北村西望作)



写真―9 ホール 文神像 (北村西望作)

文神像を現わしている。

野神像は野に立つ人すなわち民を象徴している。商いする人、工作する人、働く人である。文神像は書を読む人すなわち学問する人を表現している。二つの像はすなわち、民が学ぶ世界を語らんとする。そこに、八人の賢人の銘が刻まれる。階段正面に菅公(菅原道真)の銘が埋められている。この銘板の右に孔子、左にダーウィンの銘がある。菅公を出発点に時計まわりに進んでいけば、ソクラテス、アリストテレス、シェークスピア、カント、ゲーテ、ダーウィンと連なって一周する。端的に言えば、孔子は朱子学の、DARWIN(ダーウィン)は自然科学の学智に連なって、まさに懷徳堂の学のそれを象徴していると考えることができる。正面の菅公とは、郷土において学問をする人すなわちこの図書館の敷居をまたぐ人自身を暗喩するものである

う。この菅公の両側に孔子とダーウインが君臨している。

すなわちこれをいえば、町人五同志にはじまる近世大坂の学の系譜そのものである。格物致知は越俎をもつて無鬼論にいたる。しかしながら、その無鬼論は優れて主体的な人間の実践という倫理へと返った。石庵の「聖人も人、此方も人なり」の言葉をいえば、学ぶべきは「人の道」であることにほかならない。懷徳堂の朱子学、儒学の意味はそこにあった。

十二、井上哲次郎と八賢の銘

ところでこの八賢を選定したのは井上哲次郎（安政二―昭和十九）である。彼は日本型観念論の確立者といわれ、この大成者たる西田幾太郎の先駆をなし、東洋思想と西洋思想との融合を企てている。（船山信一・日本の観念論者 英宝社 昭和三十一年）この井上哲次郎の思想を跡付けてみれば、八賢の選定には学問にたいする彼自身の考えが tydよく反映している。彼は、明治三十三年『菅公小伝』、同三十五年『日本古学派之哲学』、同三十九年『日本朱子学派之哲学』、同四十二年『哲学上より見たる進化論』（『日本哲学全書第六巻』所収）などを著している。図書館ホールの正面を飾る三銘板、「孔子」、「菅公」、「ダーウイン」は、こうした哲次郎の思想的関心と符合する。

井上哲次郎の思想的関心と府立図書館の精神は重なっている。とすれば、府立図書館の精神は、明治期にみるこの哲学の世界に組み込まれることになる。つまり、彼の哲学の一表現として存在することになる。こうした点に立てば、井上哲次郎の選定による八銘板、とりわけ

正面の三銘板は府立図書館の精神を考えるうえで重要なものになる。

ところで井上哲次郎の国家観はつよく復古的要素をもっている。とくに『国民道德概論』（大正元年）にそれが明瞭になっており、簡単にいえば、国家が国民に先立って存在するとしている。府立図書館の精神の由来に近世大坂の学の意味を見るとき、この井上哲次郎の考えは一つの違和感をもっている。山片蟠桃は、こう言ったからである。「およそ国土があつて人がある。人があつてのち君がある。これが順である。君があつてのち人がある。人があつてのち国土があるというのは、子があつてのち父があるというようなものだ。これは逆である。順はあるべきであり、逆はあるまじきことである。」

井上哲次郎の思想はじつは府立図書館の精神を要約するものではなかった。図書館の精神ははるかにこの哲学者の世界を超えている。

十三、「懷徳堂記念室」

府立図書館が近世大坂の学の精神を空間化する造形の宇宙であることがあらためてここに問われよう。正面のイオニア式の四本の列柱に導かれる玄関から内に足を踏み入れるとホールがある。十字形のプランの中心に位置するそのホールこそが、この図書館の何たるかを言う。

設計当時の図書館のプランが残されている。図書館は吹き抜けの円形の中央ホールとこれを囲む十字形の三層の平面で構成される。（写真1-4）玄関から入って、左手に目録検索所と閲覧室、図書出納所、右手に応接室と小さな閲覧室、その奥に事務室が配置される。このプ

ランの成り立ちから、この階は主として事務的機能を受け持っていることがわかる。

下階に降りると、左手に児童図書閲覧部とトイレがあり、右手に解室、製本室、小使室、食堂、喫煙室といった室が配置され、内部の階段でつながれた三層最下階の書庫が付く。実際には地上階であるが、「地下室平面」と記されるこの階は図書館の付属的機能を受け持つ。

最上階は十字形の一翼を書庫として、他の諸室は、第一普通閲覧室、第二普通閲覧室、婦人閲覧室、特別閲覧室、懷徳堂記念室になっている。室の配置からいえば、この最上階が図書館のもっとも重要な階として構成されている。ホールの美事な木製階段は、いわゆる一人よがりな好事的趣味によるものではない。それは、地に対する天に比喩される、もっとも重要な場所たる図書館最上階をまさに示唆するメッセージであり、その造形の粹なのである。

が、そうしたことにも増して、さらに決定的な意味を現わしているのが「懷徳堂記念室」であろう。(写真10) 友純の府立図書館の建設が深く懷徳堂にかかわって誕生したことをこの「記念室」は明らかにしているからである。換言すれば、「記念室」の存在はこの図書館の真の来歴を語るものにはかならず、それは近世の大坂が近代の大阪にまさしく継承されたことを示す紛れもない証しであろう。

天と地をかたちづくる円天井の光に包まれて、二体の像が階段を迎えて両翼に鎮座する。文神と野神を現わす二体の像は、大坂の学の根本をそこに黙示している。これに連なる八賢の銘がそこに象られた^{かたち}。

この造形の宇宙は、野に立って学の世界にひたむきな希いを込めるこ

とく存在している。その宇宙は「本を読む」まことの動機の何たるかを言う。図書館は、「読書に向かう」精神のそうした世界を自ら造形するものにほかならない。大坂町人の学の傑出した意味がそこに存在している。住友吉左衛門友純は心中にこれを見ていたといわなければならない。この学の宇宙を野口孫市は空間化し造形化し、視覚化した。それは古い円形の一つの図書館であったのではけつしてない。

生前の彼の人となりや伝えた日高胖の一文(大正九年八月)がある。その抜粋である。

君資性剛直明晰の頭脳に加うるに周到の工夫をもつてし、不撓の精力と果敢の気象とをもって事に処し、美術的に構造的に之く

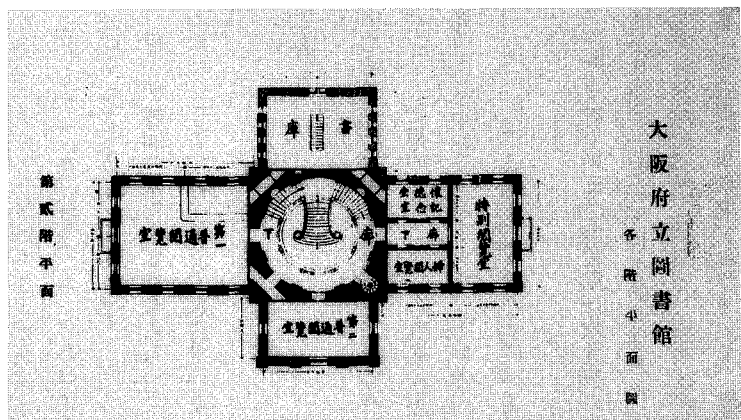


写真10 「懷徳堂記念室」(右翼部上部) が明記される。

所として可ならざるなくその天性ともいふべき独創的材能は随所に發揮せられ、かつ一点一線の微といえども之を忽諸に付せざる刻苦琢磨の努力は遂にこの才人をして斯界においていわゆる野口式なる幽玄而して精緻盡くすることなき趣味を含蓄し他の追隨を容さざる独特の風格を樹立するに至らしめたりその居常質素簡潔をたつとび居家あたかも禪堂の觀あり齋整古樸の氣室に溢るその身を持つることこのごとくなりしと共にまた情に篤く後進を撫育したびたびその急を拯い家に余財なく養痾（療養）の資もまたさこぶる菲薄なりしは同人の竊に感傷に堪えざる所なりしも君は平然として意に介する所なかりしか如きは古名匠に愧じざるものといふべし。

野口はすでに死期を悟っていた。肺患であった。「秋風や博士も墓の飾かな」この歌のあと、次の二首を歌って彼は他界した。

秋雨や桐の葉た、く音高し

生死のちまたに立つや秋の空

大正四年十月二十六日、享年四十七才、その死の約一カ月前のことであった。

引用文献

大阪市の歴史 大阪市史編纂所編 創元社 一九九九年

宮本又次 上方の研究 清文堂 昭和五十二年

住友春翠 住友春翠編集委員会 昭和三十年

故工學博士 野口孫市君小伝 日高胖謹識 大正九年

岡田温 図書館 丸善 平成九年

ハンス・ゼードルマイアー 美術史の理論と方法 島本融訳 みすず書房

昭和四十三年

小西隆夫 北浜五丁目十三番地まで「住友本店臨時建築部の創設と野口孫

市」創元社 一九九一年

図版出典

写真—1 野口博士建築図集 編輯者兼発行者 日高胖 大正九年

写真—2 筆者撮影

写真—3 同

写真—4 野口博士建築図集 編輯者兼発行者 前掲

写真—5 野口博士建築図集 編輯者兼発行者 前掲

写真—6 京都府立図書館 建物記録調査報告書 京都府教育委員会 平成九年三月

成九年三月

写真—7 筆者撮影

写真—8 筆者撮影

写真—9 野口博士建築図集 編輯者兼発行者 前掲

*なお、本論は、筆者が先稿で発表した「生としての都市——中之島をあらく——」（相愛女子短期大学研究論集 第五十三号 平成十八年）から抜粋し、加筆したものである。